

# 特別支援教育の在り方

## —自閉症への教育的支援の実際—

広陵町立真美ヶ丘第二小学校附属幼稚園 教諭 杉岡 千榮子

Sugioka Chieko

### 要 旨

自閉症のある子どもが、幼稚園生活の中で、教員や友達など信頼できる人を支えにして、自分の周りの世界や情報を理解し、安心して自ら行動することができるようにするための支援の方法を探る。

キーワード： 自閉症、構造化、保育案

### 1 はじめに

近年、文部科学省から特別支援教育の方向性が示される中、当園においても自閉症のある特別な教育的支援を必要とする子ども（以下A児と記す）が在園している。様々な関係機関と連携しながら、A児の実態を教職員全体で共通理解し、それぞれの場面に応じた具体的な支援や、保育案の在り方を見直し、よりよい保育の在り方を考察する。

### 2 研究目的

自閉症のある子どもは、言葉による情報よりも視覚から得る情報の方が理解しやすいと言われている。そのため時間の経過や物事が進行していくことが分かりにくい面がある。

そこで、日常生活の情報の伝達の仕方を見直し、A児に分かりやすい言葉がけや環境の構造化を検討し、保育案の見直しや支援について考察する。

また、担任やクラスが替わるなどの新しい環境の中で、信頼できる人を増やし、自ら理解して行動できるようにするための支援についても研究する。

### 3 研究方法

- (1) 実態の把握と環境の構造化についての考察
- (2) 友達とのかかわりを増やす支援の検証
- (3) 保育案の見直しによる課題設定

### 4 研究内容

- (1) A児の実態

#### ア 生育歴

A児は平成15年4月3歳児クラスに入園し、現在5歳児クラス（男児12名、女児15名、計27名）に在籍し、3歳児から3年間同じ加配の教員が付いている。

入園前、奈良県心身障害者リハビリテーションセンター小児科にて自閉症と診断され、通院している。感覚統合訓練に月2回、広陵町療育保育室に週2回通っている。

実態把握のため、KIDS乳幼児発達スケールTタイプを実施した。その結果、運動操作、しつけの項目が強く、理解、表出、概念、対子どもの項目が弱いことが分かった。

## イ 経過

### (ア) 3歳児（平成15年度）の様子

好きなことはミニカーで遊ぶことや電車の本を見ることである。

不安になったときには、ミニカーをサッシのレール（敷居）の上で動かして遊んだり、道路や駐車場が描いてある紙の上で動かしたり、保健室のベッドに入ることもある。

呼名されると返事ができるようになった。また歯磨きやトイレの排尿もできるようになった。保育室の中でじっとできなかつたのが、3学期になり、5分くらい椅子に座れるようになった。

### (イ) 4歳児（平成16年度）の様子

好きなことは3歳児のときと同じで、繰り返し楽しむ姿が見られた。不安になったときには、掃除用具入れに入るようになった。

「特急」「アーバンライナー（特急の名称）」「じゅう（水）ほ（流そう）ね（ねえ）」「ちょうだい」の言葉が出るようになった。

また、友達と手をつないで歩けるようになり、集団登降園もできるようになった。身近な人への関心も出て、手にタッチ（おはよう、さようならの意味）や顔を覗き込む（こんにちはの意味）などの動作でかわりをもつような場面が出てきた。

### (ウ) 5歳児（平成17年度）の様子

キャラクターの絵を描く、ひもを結ぶことなどが好きなことになった。（図1）

気持ちを落ち着かせるため、保健室のベッドや掃除用具入れに入ることもあったが、9月になり、なくなった。

その代わりに、シーツにくるまったり、保育室のリラックススペースで過ごしたりすることが多くなった。

不安なときには、遊具（ケーキ・サンドイッチ・ハンバーガー等）を手に持って行動することで、いろいろな場面に参加できるようになった。

二学期には、「チータッター」とよく鼻歌を歌うようになり、話し声も以前より大きくなった。

また「おはよう」「ありがとう」「すごいすごい」「丸」「三角」「四角」「バイバイ」「バナナ」「どうぞ」等、急速に言葉が増え、「あっち」「こっち」と言ったり、自我が芽生えて「イヤだ」と言う場面も出てきた。

11月下旬には、ひらがなや数字に興味をもち始めた。

## (2) それぞれの場面における支援

### ア 言葉で説明しても理解しにくい場面

言葉で説明しても理解しにくいときには、視覚的に理解できるように工夫した。持ち物の整理や自分の場所が分かるように、A児が3歳児から使ってきた緑色のテープを張ることで示した。また具体物で示したり、写真や絵カードは色別にして整理して示すようにした。（表1、図2）

表1 色別カードの分類

色	分類	写真カード
ピンク	日課	着替え・椅子・かばん・帽子・うがい・歯磨き・お弁当等
白	遊具	積木・ブロック・パズル・ドミノ・自由画帳等



図1 キャラクターの絵

黄	行動を示す物	座る・並ぶ・絵本を読む・当番活動をする・楽器で遊ぶ・製作をする・絵を描く等
青	用便を知らせるため	小便器・洋式便器



図2 カード



図3 朝の用意のカード



図4 スケジュール表

イ いつもと違う場面

行動をパターン化しやすいので、新しい事柄を行うときには、無理なくできて、達成感が味わえるよう、指示を一つずつ与えるように心がけた。

ウ 見通しがもちにくい場面

手順を示すカードをつくったり、スケジュール表をつくったりした。(図3、図4)

視点が合わず何を見ているのか、何を考えているのか分からないときは合図を送るようにした。

不安になったときは、落ち着くまで時間を十分に取った。

(3) 保育案

少しずつ成長を感じさせてくれるA児と生活する中で、どのような場でどんな手立てが必要かを明確にするために、保育案の見直しをした。活動一つ一つに対しての支援、配慮をはっきりさせることができ、後で見直しても分かりやすくなった。

ア 個別の保育案



図5 保育室のリラックススペース

目標	実態	人的な支援 環境の構造化	その後の様子
友達とのかかわりを増やす (4月)	A児が加配教員のそばにいる。	お弁当のとき、加配教員は少し離れて座り、友達とのかかわる時間を増やした。	初回は加配教員の横に自分で移動したが、2回目からは友達と食べることができた。
	クラスの友達の名前を呼ぶことはあってもかかわりは少ない。	かかわり方を知らせる。 ・言葉のかけ方 ・手のつなぎ方 かかわる機会を増やす。	担任がほかの子どもにプールカードを渡しているとA児が近付いて来てカードを受け取り渡すことを喜んだ。 友達と手をつないで歩くようになった。

友達とふれあう (7月)	ベッドに行くことが減り、保育室の隣の教材庫の奥で遊ぶ。	教材庫でシートにくるまるA児の横に女児の遊びの場を設定した。	数日経つと、B子に誘われて一緒に女児の遊びの場にシートを持ち込んで遊ぶようになった。
友達と一緒に遊ぶ (10月)	ベッドや掃除用具入れに入ることがなくなった。教材庫で主に女児たちと一緒に遊んでいる。	教材庫は暖房設備がないので、保育室にリラックススペースをつくった。	リラックススペースで過ごすことが多くなった。友達が具体物や写真カードを見せて話かけると少し理解できる様子であった。
自分から友達にかかわろうとする (11月)	リラックススペースが満員になると保育室の片隅で遊んでいた。	リラックススペースを半分に仕切ってA児の専用スペースをつくり、カーテンを付けた。(図5)	専用スペースで一人で遊んだり自分でカーテンを開けたりして友達とかかわるときと自分の時間を楽しむときができ楽しそうに過ごすようになってきた。

イ 運動会3年間の保育案

	3歳児 (平成15年度)	4歳児 (平成16年度)	5歳児 (平成17年度)
A児の姿	教員が自分に話しかけていることが理解できない。	教員が自分に話しかけていることは分かるが、意味は理解できない。	友達が自分に話しかけていることが少し分かるようになった。 身ぶり手ぶりや言葉で自分の思いを伝えようとする。
ねらい (支援)	運動会の一部に参加する。 (本人の気持ちを尊重して、無理に参加させない。)	運動会に嫌がらずに参加する。 (落ち着けるような物を持つことを認め、友達の姿から少し参加してみようかと思えるようにする。)	運動会に参加し、みんなと一緒に体を動かす楽しさを味わう。 (落ち着けるような物を持つことを認め、友達と一緒にできるだけ多く参加しようとする。)
練習時の様子	全く参加しない。  園庭の遊具(滑り台や築山)で加配教員と過ごす。	ときには電車の絵本を地面に立てて、自分の場所に立つことができた。  園庭の遊具で加配教員と過ごす。	加配教員は横について指導の補助をした。参加しようとする気持ちがうかがえたので少し離れて見守った。 運動会直前には、一人で頑張れた。
運動会当日の様子	電車の絵本を持って参加する。加配教員と体をくっつけていた。手を上げてもらったりして踊った。	自分の場所に電車の絵本を地面に立てて、体を加配教員にもたれながら踊った。	何も持たずに一人で参加できた。 加配教員は離れて待機していた。
運動会後の様子	しばらく経って踊った曲を口ずさむ。	踊った曲を運動会直後に口ずさむ。	踊った曲を何度も口ずさむ。自発活動の時間にも友達が踊っている中に

子			入って踊る。 運動会で使ったバチやバトンを手にし、踊りたいということを自分から表現した。
---	--	--	---

ウ 日々の保育案(例) 評価の規準 ◎達成できた ○できた △少しできた ×できない

時間・活動	11月18日(金) 援助・配慮	支援者	評価	今後の支援・配慮
8:30 登園 あいさつ	手のひらを合わせて「おはよう」と言ってタッチをする。	職員	○	自分から「お(はよう)」と言えるようにする。
着替え 持ち物の始末	様子を見守り、注意散漫になったときは手順を言葉で伝えたり、「朝の用意のカード」を見せたりする。終わった作業のカードを入れる姿を見守る。	加配	△	気になっている物を取り除くようにする。
9:00 かけっこ	友達の後ろについて走る姿を後ろから見守りペースダウンしたときは励ましの言葉をかけるようにする。	加配	○	ゴールまでの長さを大まかに理解できるような手立てを考える。
9:40 好きな遊び	遊んでいる姿を見たり、楽しさを共有したりする。次の行動を探していたら、違う遊びに誘い教員も一緒に遊びながら遊び方を知らせる。	担任 加配	◎	
10:20 片付け	友達が片付けている姿を見て、次の行動に移ったことに気付けるようにする。	加配	△	「片付けるよ」の言葉がけで何らかの行動ができるようにする。
手洗い うがい用便	手洗い、うがいをする様子を見守り、必要に応じて言葉をかける。	加配	△	一緒に手を洗い、うがいをする。
10:45 手遊びやゲーム	椅子に座るように写真と言葉で促す。	担任 加配	△	友達が呼びかけたり、カードを使って促す様子を見守る。
	友達が楽しそうにしていることや、特徴のある動きを伝え、遊びに参加できるように促す。	加配	○	A児の参加する姿を認め、楽しめるようにする。
11:00 降園準備	注意をそらさず、着替えができるように言葉をかける。	加配	×	終わった作業のカードを入れることを楽しみにしているので、それを近くに置いて、着替えるように促す。
11:30 降園	気に入った絵本を持って整列する姿を見守り、出発時に絵本を受け取る。	加配	◎	

## 5 研究結果と考察

- (1) 一日のスケジュールをホワイトボードで張り出していることで、一日の生活の流れをクラス全員が分かるようになった。急な予定変更があるとき、混乱することがあるので、A児がカードをポケットにしまうことで、活動が終わるということを知ったり、ボードを見て次に行う活動が分かったりする上で大きな意味があった。
- (2) 保育案の見直しをしたことで、どのような場面で誰がどのように支援するのかということが、明確になった。また行事参加においても、今年度の目標がはっきりした。
- (3) 日課や繰り返して行う行動は、教員の言葉がけやクラスの友達の様子を見て行動に移せるようになってきた。そこで、カードを減らすことを考えたが、友達とのかかわりが増えた二学期、友達が写真カードをコミュニケーションの一つとして活用するようになり、A児とのかかわりがみられるようになった。
- (4) リラックススペースを保育室内に設定したことは、A児に話しかける友達が増えたり、A児の方からふれあいを求めたりするきっかけとなった。

## 6 まとめと今後の課題

幼稚園は、一人に一つずつ、自分のマークがあり、持ち物を始末するところには、すべてマークが貼ってある。また、混雑を避けるために、グループ別の色テープを付けたり、片付けやすいように絵を張って示したりもしている。このことは、幼稚園児に分かりやすいだけでなく、自閉症のある子どもへの支援に有効なものの一つであるということを改めて感じた。これからも環境の見直しに努め、A児にとって分かりやすい環境をつくっていきたい。

一学期、A児は教員の手を引っ張ってブランコへ行き、押して欲しいということを伝えようとしたり、友達の歌う声が大きすぎると感じたときは、ピアノを弾いている教員の手を持って、下におろすことで知らせようとした。A児は、身近な教員には要求を表し始めたので、ほかの教員や園児にもこのような意思表示ができるようにと、友達とのかかわりを増やす取組をした。

二学期になって、A児は言葉が急に増え、自分から友達にかかわろうとする場面が多くなった。また、友達の様子をよく見て行動に移すことができるようになってきた。

三学期になると、A児が写真カードを使って自分の気持ちや要求を表す姿が見られるようになった。クラスの友達もA児に優しく接し、A児のことを思いやって発言する姿が多く見られるようになった。

幼稚園生活において、教員や友達を支えにして、A児も少しずつ興味や関心を広げ、自分の思いを表現することができるようになってきた。しかし、長期の保育計画や、具体的な目標設定について、課題を残した。残り少ない園生活がよりよいものになるよう、考えていきたい。

## 参考文献

- |                       |             |      |
|-----------------------|-------------|------|
| (1) 自閉症の人たちを支援するということ | 朝日新聞厚生文化事業団 | 2000 |
| (2) 自閉症のひとたちへの援助システム  | 朝日新聞厚生文化事業団 | 1999 |